



福島県 小学校長会 会報

- 巻頭言 1
- 教育ニュース 2
- 特集「ふくしまに誇りを持ち 多様な他者と協働しながら しなやかにたくましく未来を切り拓く子どもを育てる学校経営の推進」..... 3～6
- 支会だより 7～10
- ふくしま人 この道に生きる 11
- 表彰、役員・事務局員名簿 12



福島県小学校長会会長あいさつ

**会員一人一人の拠り所となる校長会をめざして
～頼りになり、支えとなり、根拠となる場へ～**

福島県小学校長会会長 笠原 聡美

本年は東日本大震災と原子力発電所事故という未曾有の複合災害から15年という大きな節目を迎えました。当時、先輩方が「学校は復興の最大の拠点である」と掲げ、子どもたちの学びを最優先に全力を尽くしてこられた歩みは、今、確かな結実を見せています。

2025年3月に発表された本県「子どもの心サポートチーム協議会」の提言では、福島の子もたちが「ふくしまに誇りを持ち、しなやかにたくましく生きる力」を育んできたことが示されました。また、この力は福島だけでなく、日本、そして世界で起こる様々な問題に立ち向かう力にもなることも示されています。

私たちはこの成果を誇りとし、令和9年度に開催される「第79回全国連合小学校長会研究協議会福島大会」を見据え、大会副主題を「ふくしまに誇りを持ち 多様な他者と協働しながら しなやかにたくましく未来を切り拓く子どもを育てる学校経営の推進」と決めました。学校が未来を切り拓く子どもたちを育む場となるか否かは、経営の舵取りを担う私たち校長の肩にかかっています。

ます。山積する課題を見極め、何を最優先すべきかを判断する「決断力」が求められると同時に、私たち自身が生き生きと職務に邁進する姿を通して、次代を担うリーダーを育てていく責務もあります。

校長先生方お一人お一人が孤軍奮闘することのないよう、本会を「校長先生方の拠り所」にしていきたいと考えています。横のつながりを強め、各支部・各部の活動を活性化させることで、本会を「頼りになり、支えとなり、根拠となる場」へと進化させてまいります。現場の声を真摯に汲み取り、教育環境の整備や処遇改善について関係機関へ働きかけるとともに、被災地校への支援や風評・風化への対策にも継続して取り組む所存です。

全国大会への準備という大きな山を控えておりますが、会員の皆様の声を真摯に受け止め、一歩ずつ着実に歩みを進めてまいります。

本県のすべての子どもたちが、自らの未来を切り拓いていけるよう、皆様と共に全力で取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

〈 令和8年度 福島県小学校長会第1回理事会開催 〉

福島県小学校長会の第1回理事会が4月20日(月)、パルセいいざかにおいて開催されました。会長として福島市立三河台小学校長 笠原聡美氏が選出されました。また、新役員として次のとおり決定するとともに、本年度の活動方針などが承認されました。

■会長	笠原 聡美 (三河台)
■副会長	佐藤 秀一 (一 箕)
	草野 節生 (橘)
	柏谷 智也 (森 合)
	和田 裕二 (植 田)
■監 事	榊原 康夫 (船 引)
	穴澤 正志 (喜多方二)
	石井 智明 (双葉南)



令和 8 年度 県小・中学校長会合同開会式あいさつ



福島県教育委員会教育長 鈴木 竜次

令和 8 年度福島県小・中学校長会合同開会式の開催にあたり御祝いを申し上げます。

皆様には、日頃より学校教育の発展のため、日々ご尽力をいただいていることに心から感謝申し上げます。

さて、今年は東日本大震災と原子力発電所事故から 15 年、現在の福島県が誕生してから 150 年という節目の年にあたります。改めて先人たちが幾多の逆境に挑

んできた足跡に思いを馳せながら、今後も復興・創生に向けて様々な課題を乗り越えていかなければなりません。

そのような中で、教育は、未来を切り拓くための最重要施策であり、子どもたちに社会の課題へ主体的に向き合うための資質・能力を育むことが豊かな福島をつくることにつながります。令和 4 年度から始まった「第 7 次福島県総合教育計画」においては全ての子どもに必要な資質・能力の育成とともに、一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せであるウェル・ビーイングの実現を目指し、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへの転換を進める「学びの変革」と、その実現に向けた環境づくりとしての「学校の在り方の変革」を両輪とし、6 つの施策を展開しているところであります。

特に、施策 1 「『学びの変革』によって資質・能力を確実に育成する」において、デジタル教材や ICT を活用した学習履歴に基づく個別最適化された学びの充実、英語力向上に向けた小中高連携に取り組むとともに、市町村教育委員会と連携した学校訪問指導や各種研修により教員の指導力の向上を図ります。また、幼児期からの発達段階に応じた「探究的な学び」を通して、子どもたちが地域に愛着を持ち、自らの問いや課題に向き合うために必要な力を育成してまいります。

また、施策 3 「学びのセーフティネットと個性を伸ばす教育によって多様性を力に変える土壌をつくる」においては、特別支援教育の充実や、社会的自立と就労の実現に向けた関係機関等との連携強化に努めるとともに、様々な困難を抱える児童生徒とその保護者を支援するため、不登校児童生徒支援センター（roomF）におけるオンライン支援を充実させるなど、子どもたちが安心して学ぶことができる教育環境の整備に取り組んでまいります。

さらに、施策 6 「安心して学べる環境を整備する」では、県内外で大規模災害が発生した際に支援等を行う教員等による支援チーム「HOPE-F(ホープふくしま)」に新たに市町村立学校教員を募集するなど、体制をより充実させるとともに、昨年度に危機管理部が教育庁と協力して作成した防災動画教材等も活用し、発達段階に応じた能力の育成や意識の向上にも努めてまいります。

今後も、国や市町村、関係機関と手を携え、子どもたち一人一人が主役となる「本県ならではの教育」をしっかりと実現できるよう取り組んでまいります。

結びとなりますが、皆様がリーダーシップを存分に発揮し御活躍いただくことで、本県の教育がますます充実するとともに、福島県小学校長会及び福島県中学校長会が、さらなる発展をされますよう祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

岩
瀬

豊かな知性と人間性をそなえた健全
で実行力のある子どもの育成
～地域とつながり 地域に学ぶ～

須賀川市立長沼小学校 山田 伸

1 はじめに

本校は、全校生 63 名、今年度 153 年目を迎えた小規模校である。学区は須賀川市の西部に位置し、西に勢至堂峠、その麓に藤沼湖がある。また、学校の裏にある長沼城址（城山）には、山桜やソメイヨシノがおよそ 300 本ほど植えられており、春の見ごろの時期は校庭から山一面が桜で彩られ、観光名所にもなっている。このような自然環境に恵まれた場所にある本校の取り組みを紹介したい。

2 ふるさとに誇りをもち 多様な他者と協働しながら しなやかにたくましく未来を切り拓く子どもの育成

本校では、地域学習の一環として、地域の自然や伝統文化に触れる体験活動を行っている。川の見学学習では、地域を流れる川の自然環境や役割について学び、ふるさとの豊かな自然を守ることの大切さについて考える機会としている。

また、地域の方々の協力を得ながら行う炭焼き体験では、昔ながらの暮らしの知恵や地域文化について学び、地域とのつながりを深めている。豆腐づくり体験では、学校近くにある豆腐店の協力を得て、食への感謝や地域産業への理解を深めている。

(1) 身近な環境について調べよう【5年総合】

5年生は、総合的な学習の時間で、「身近な環境（江花川）について調べよう」の学習に取り組んでおり、「江花川に住む生き物や水質の調査を通して、身近な環境を守るために自分達ができることを考える。」をねらいとしている。河川水質環境調査「遊水会」の先生方にご指導いただきながら、江花川の水生生物を採集して指標生物を調べることで、江花川の水質について



判定し、江花川の水質は「ややきれい」な水であることが判明した。子ども達は、「サワガニゲット!」「魚とれたー。」などの声を上げながら、とても熱心に取り組んでいた。

(2) 長沼を知ろう【3年総合】

① 炭焼き体験

できあがった炭を見て、「松ぼっくりも炭になるんだね。」「部屋の消臭剤にもなるんだって。」など、炭が燃料以外にも身近な生活の中に溶け込んでいることを学ぶことができた。



② 豆腐作り体験

20 数年に渡って、柳沼豆腐店のご夫婦においでいただき、3年生が豆腐作りを体験している。「水につけておいた大豆と水を合わせてミキサーにかけ、それを絞って豆乳のもとをつくり、10分ほど火にかけておくと湯葉ができる。・・・」などの過程を踏んで豆腐ができあがっていく。家で食べるのを心待ちにしていた子ども達だった。



これらの活動では、地域の方々との交流を通して、多様な考え方や生き方に触れることができるだけでなく、子ども達が互いに協力しながら活動を進める姿も見られる。体験を通して得た学びは、教室での学習だけでは得られない実感を伴ったものとなり、子ども達の主体性や協働性の育成につながっている。

3 むすびに

令和11年度開校予定である長沼地域義務教育学校に向けて、長沼中学校区のこども園・小・中学校との連携を図りながら、子ども達一人一人を大切にする地域の学校として、子どもの夢を育む学校を目指している。

今後も、家庭・地域との連携を大切にしながら、「ふるさと福島、ふるさと長沼」に誇りを持ち、多様な他者と協働し、しなやかに未来を切り拓く子どもの育成を目指した学校経営を推進していきたい。

石川

ふるさとを愛し、ふるさとに誇りを持つ子どもの育成
～地域人材との協働活動を通して～

石川町立石川小学校 板橋 敬史

1 はじめに

かつて、石川町には8つの小学校があったが、少子化を背景とした統合が段階的に進み、令和7年度に、いよいよ町で1つの小学校となった。

新・石川小学校の初年度となった昨年度は、旧8小学校の伝統や思いを結集することで、町に一つの小学校だからこそのふるさと教育(学習)が展開できることとなった。そこで、学校経営ビジョンの重点目標を「多くの体験を学びにかえ、夢や希望を追い求める子～地域と共に、新たな一歩を！～」とし、地域人材を積極的に活用し、協働活動を通してふるさとへの思いを深める教育活動を展開してきた。

2 地域人材との協働活動

統合前の8校で実施されていた各校の特色のある活動は、統合にあたって現在の石川小学校に引き継がれ、「いしかわふるさとカリキュラム」の一部として実践している。実践にあたり大切にしているのは、単にこれまでの活動をなぞるのではなく、目の前の子どもたちの特性やニーズ、協働してくれる地域の方々の思いをマッチングさせながら、①児童と地域の方がともに喜びを感じる活動にすること、②活動を通してふるさとへの思いを深めるものとする。以下、2つの実践を紹介する。

(1) 第3学年「サツマイモ大作戦」

本単元は、地域の自然を生かしてサツマイモを栽培する方やそれを加工する方とのかかわりを通して、地域のよさに気づき、ふるさとの将来を考えることがねらいである。

① サツマイモを育てよう

地域の自然や農業の歴史について調べたあと、里づくり委員会の方の講話から、農家の人々が様々な工夫をしながらサツマイモ作りに取り組んでいることを学んだ。また、サツマイモの苗植えを体験し、里づくり委員会の方との関わりを通して課題設定につなげた。

② 収穫、加工に挑戦！

里づくり委員会の方々と協働で、サツマイモ

の栽培と収穫を体験しながら、生産・出荷・加工の現状や課題等について調べた。また、町内で干しいもを製造、販売している方の指導を受けながら、干しいもづくりに挑戦した。



③ 名産品づくりに挑戦！

石川町産サツマイモのおいしさをさらに多くの人に知ってもらうため、地域の製菓業者に協力していただきながらスイートポテトづくりに取り組み、商品化の可能性を探った。

(2) クラブ活動「鉱石クラブ」

本校には、他校に例を見ない「鉱石クラブ」が存在する。水晶等、数多くの鉱石が産出され「日本三大ペグマタイト鉱物産地」の一つに数えられる町の魅力に触れ、それを発信しようと、鉱石に興味を持った児童が集い、鉱物を調べたり、鉱山跡で採掘したりしている。



① 石川町産の鉱石を知ろう

歴史民俗資料館「イシニクル」を訪ね、館長や学芸員の方から講義を受けたり、助言を受けながら一緒に活動計画を立てたりした。

② 石川町の鉱石にふれよう

町内に残る鉱山跡に出向き、保存会の方と共に鉱石を採取した。また、学芸員の指導を受けながら、石の標本づくりを行った。

③ 石川町の鉱石の魅力を伝えよう！

活動の様子をまとめたスライドやオリジナルの標本を展示し、児童、教職員、保護者に見てもらう機会を設けた。その際、学芸員の方も来校し、見学者からの質問に対応してくださった。

3 むすびに

学校に協力的である地域性に加え、町で一つの小学校になったことで、地域素材、人材が豊富となった。今後も地域との協働活動を通じた本校ならではのふるさと教育が展開できるよう、校長としてのビジョンを児童、保護者、地域に明確に示しながら、ふるさとに愛される学校を創っていききたい。

田
村

子どもを真ん中に置いた 学校づくり

～「中妻ならではの教育」の実践～

三春町立中妻小学校 白岩 新一

1 はじめに

本校は、全校児童数46名の小規模校である。令和8年度末をもって閉校となることが決まっており、同じく閉校となる中郷小学校とともに、令和9年度に三春小学校へ統合される。令和7年度に三春・中妻・中郷小学校開校準備委員会が設立され、総務部会・学校運営部会・PTA部会の3つの部会に、各校の学校運営協議会代表・保護者代表・学校代表が参加して円滑な統合に向けて諸課題の検討を進めている。学校運営部会では、「子どもが第一」の方針を掲げ、三校交流活動を行ってきた。令和8年度は、各学年、三校合同授業を計画している。

このような統合に向けた動きと並行して、本校においては、教育理念に「子どもも教職員も支え合い・高め合い・学び合う『中妻ならではの教育』」を掲げ、学校経営を進めている。以下に子どもを真ん中に置いた小規模校「中妻ならではの教育」の実践の一端を述べ、特集テーマの趣旨に重ねていきたい。

2 「教わる学び」から「自ら学ぶ学び」へ

本校は、少人数であるが故に子どもと教師が密接な関係になる。それがよさでもあるが、教師がその環境に慣れてしまうと教師主導の授業になり、子どもが受け身になるという課題に直面する。三春町及び本校では、協同的な学びによる授業改革を推進している。教師は、ペアやグループを生かした学びづくりに意を用い、子どもたちが問いをもち、夢中になって学ぶ姿、挑戦する姿を目指している。ペアやグループの学び合いでは、「ねえ、これどうやるの?」「これ、どういう意味?」などの言葉が溢れ、仲間を頼り、相手は頼った子どもに寄り添う姿が見られる。何でも「先生!」とヘルプするのではなく、子ども同士で支え合い・高め合い主体的に学び合う。昨年度、夏休み前までの1年生は、私が授業参観のため教室に入ると、「校長先生!」と多くの子どもが授業から意識が離れてしまうことがあったが、今では授業参観に行っても、かなり授業に集中

している。ペアで頭を突き合わせて学び合っている。私に気付いても「校長先生、いたの?」そんな感じである。学びに向かう子どもたちの成長に嬉しさを感じる瞬間である。



3 教師への伴走型支援

本校では、協同的な学びによる授業改革を進めているが、「教える授業」よりも「学び合う授業」は相当難しいというのを実感する。それだけに教師の授業づくりの悩みや課題を共有し、最後は前を向けるようにしていくことが校内研修には必要である。私も授業実践者として共有したい。そんな思いで担任の先生にお願いして5・6年の道徳科の授業を月に1回担当している。授業をすると手応えもあるが、学習者の視点で見たときに「果たして学んでいたのか」と後悔や課題が出てくる。校内研修は、同僚性を生かしてトライ&エラーで目指す授業に近づけていくことが肝要だ。教師と同じ歩みで学び合うことも研修支援になると考えている。

4 おわりに

今年度始め、保護者と地域の方で成る閉校実行委員会が設立された。5月16日の運動会では、閉校実行委員会の閉校行事部会が中心となって、方部対抗リレーを復活させ、大いに盛り上がった。閉校という現実にも直面しながらも、保護者や地域の方が一丸となって創り上げたエンターテイメントは子どもたちの心に刻み込まれた。

今年度の総合的な学習の時間は、地域のひと・もの・ことに接点をもって探究的な学びを展開していきたいと考えている。子どもが主体的に学び、多様な他者と協働しながら、地域とつながる教育活動をとおして、自らの可能性に挑戦し続ける力を育みたい。



し
ら
東
西
か
わ

ふるさと自慢ができる子どもの育成

～持続可能な地域学習の工夫～

白河市立釜子小学校 唐橋 浩二

1 はじめに

子どもたちがふるさとに誇りを持つためには、まず、自分のふるさとをよく知ることが大切だと考える。白河市では、「白河の歴史文化再発見事業」を行っているので白河市のことについての学習は教育課程に位置付けられている。しかし、子どもたちにとって“ふるさと”とは、やはり東地域（旧東村）である。そこで、中学年の地域学習をより効果的なものにするのが大切であると考えた。

2 持続可能な地域学習にするための実践

地域について学習するのは主に中学年であるが、本校では総合的な学習で教育課程に位置付けられてはいるものの、指導は各担任に任されている。また、中学年は初任者等の経験の浅い教員や他地区から来て、地域を知らない教員が担任することが多く、教員自身も困っている。つまり、子どもたちにとって地域学習が効果的な学習になっていないというのが現状である。

そこで、持続可能で効果的な地域学習の実現を図るために次のような取り組みを行った。

(1) 実践紹介

① 地域コーディネーターの活用

市が推進する「学校協働活動連携事業」により配置された地域コーディネーターに地域人材の発掘と確保を行っていただき、学校と地域間の連携や調整を行っていただいた。また、地域コーディネーターに学校運営協議会の委員になっていただき、より学校と連携が図れるように調整した。

② 教科横断的学習の展開

4年生の社会科「古くから残るもの」の単元と総合的な学習「釜子の歴史」がバラバラな時期に組まれていたが、教育課程を変更して時期を合わせて行い、内容もリンクさせることでより効果的な学習にした。さらに地域コーディネーターをお願いして、



日吉神社見学

東地域に残る歴史的建造物等を巡るツアーを実施し地域の歴史に触れる機会をつくった。案内していただく講師の方も見つけていただき、子どもに分かるように説明していただいた。

③ 地域の企業との連携

地元企業の方にも学校運営協議会の委員になって

いただき、学校と地域でできることについて一緒に考える機会を設けた。その中で実現で



農業用ドローンの説明

きたのがゼンショーライスホールディングさんによる「スマート農業体験」である。5年生の社会科の学習としてドローンを活用した先進的な農業の紹介していただくとともに、ドローンの操縦体験をさせていただいた。

(2) 成果と課題

- 地域コーディネーターを活用し、さらに学校運営協議会を通して地元の企業も巻き込んだことで、担任が地域に詳しくなくとも効果的な学習ができるようになった。
- 3・4年生は、これらの学習を通して東地域に対する理解を深めることができ、さらに地域の伝統行事に積極的に参加するようになった。(200年の伝統がある琴平相撲への参加 R6:4人→R7:21人)
- やはり、主は担任であるので、任せきりにならず担任の主体性が大切になってくる。

3 むすびに

児童は、東地域を知ること、白河市や福島県の歴史、文化へと視野が広がり、ひいては東地域との結びつきなどについて考えるようになると思われる。また、自分のふるさとの素晴らしさが自覚できるようになれば、生きる上で大きな自信へとつながると考える。これからも、歴史や文化、自然が豊かな環境や協力的な地域の方々などの利点を生かし、子どもたちにとって効果的な地域学習が推進できるよう校長として多くの視点で考えていかなければならない。

安
達

学校経営力の向上をめざし学び合う
～「安達はひとつ」を合い言葉に～
二本松市立二本松北小学校 児山秀典

1 はじめに

本支会は、二本松市、本宮市、大玉村の2市1村25名の会員で組織している。令和8年度は新会員3名を迎え、新たなスタートを切った。昨年度の研究協議会安達大会主管としての役割を果たす中で育んだ絆も生かしながら、校長としての資質・能力、学校経営力の向上という目標達成に向け、活動を進めている。

2 今年度の取組

(1) 研究の推進

「ふるさとに誇りをもち 多様な他者と協働しながら しなやかにたくましく未来を切り拓く子どもを育てる学校経営の推進」に向け、校長の果たすべき役割と指導性が明らかになるよう研究を推進する。全連小福島大会開催を受け、3年間となる第IV期研究を実のある実践研究とするために「支会全体での共同研究」を計画的に進める。

(2) 各県大会安達大会の充実に向けて

令和9年度開催予定の県書写書道研究会安達大会のプレ大会として7月29日に開催されるオープン研修会の充実に向け、県書写書道研究会と連携、協力を図る。

10月15日、大玉村を会場に開催される県小教研道徳科研究部会安達地区大会に向け、県事務局と共に安達地区道徳科研究部会の準備、運営に協力する。

(3) 各専門部会

行財政・研究・生徒指導・広報の4つの専門部で活動を進める。行財政や生徒指導では、各種調査などを基に当面する諸課題についての情報収集を行うと共に、共通する課題について情報交換を行う。広報では、年3回発行の広報「安達太良」への寄稿を通じて、会員相互の研鑽・交流を推進する。

(4) 関係機関との連携

各種教育団体や小中学校長会協議会との連携を密にし、課題の解決と教職員の資質・能力の向上に資する活動の充実を図る。

3 むすびに

学校課題が多様化・複雑化している今、会員の連携を強化し、「安達はひとつ」の合い言葉の下、課題解決に向けた取組を推進していく。

郡
山

学び合い、支え合う校長会に
郡山市立橘小学校 草野 節生

1 はじめに

本支会は、小学校48校、義務教育学校2校の計50校で令和8年度をスタートした。新たに新任校長5名、副校長3名、転入校長4名を迎え、特例任用校長13名を含む校長・副校長54名による組織体制となっている。

校長相互の「学び合い」と「支え合い」を基盤に、「チーム郡山」として横の連携を大切にしながら、支会の結束力を高めるとともに、校長としての資質・能力の向上及び各校の教育活動の一層の充実に努めていきたい。

2 今年度の取組

(1) 次年度の全連小福島大会に向けて

令和9年10月、郡山市を会場として全国連合小学校長会福島大会が開催される。本支会としては、大会事務局と連携を図りながら、大会実行委員会としての組織体制を整備し、各部・各班の役割を明確にするとともに、計画的で確実な運営体制の構築を進めていきたい。また、部会間の連携を密にし、進捗状況を共有しながら計画を着実に遂行することで、全国から参会される皆様にとって実り多い大会となるよう万全を期していきたい。県内の校長先生方のお力をお借りしながら、「オール福島」を合い言葉に、準備を進めていく所存である。

(2) 学校課題への対応

各学校が抱える不登校や働き方改革等の諸課題については、それぞれの実践や課題、事例研究等を共有し、協議を通して「実践知」の共有を図っていきたい。あわせて、外部講師等の招聘を通して専門的知見を取り入れ、校長としての課題解決に資する専門性の向上と、学校経営への支援の充実に努めていきたい。

3 むすびに

会員相互が課題や情報を共有し、孤立化の防止に努めるとともに、横の連携による相互支援を大切にしながら、安心して相談し合える関係づくりを進めていきたい。この一年、支会としての組織力をさらに高め、郡山の子どもの未来を拓く教育の推進に向けて、会員一同、着実に歩みを進めていきたい。

田
村

親和的な雰囲気大切に

田村市立船引南小学校 岡田 征之

1 はじめに

本支会は、田村市、三春町、小野町の1市2町、14名の会員で構成されている。令和8年度の人事異動により新しく4名の会員が加わり、新鮮な中にも田村支会のよさである温かく和やかな雰囲気でスタートした。

2 今年度の取組

7月2日～3日に開催される東北連合小学校長会研究協議会宮城大会での実践発表に向け、学校安全について「自らの命をまもる安全教育・防災教育の推進と校長の在り方」を研究内容として、研究部を中心に準備を進めている。

5月1日に行った第1回地区小中学校連絡会では、東北連小において発表する内容を柳田憲子先生（田村市立常葉小学校長）から発表していただいた。発表後の協議では、校長として防災教育をどのように進めていけばよいのかについて、発表をもとにしたグループ協議を行った。全体共有では、「ふくしまならでは」をどのように取り入れていくのかや、校長が協働的な推進体制をつくっていくことについての意見が出された。また、先進的な取組の紹介もされるなど、大変有意義なものになった。

今回の協議内容をもとに発表内容をよりよいものにできるよう、今後も研究テーマに基づき、各校で実践を行うなど、田村支会一丸となって活動を行っていく。

この他にも、行財政部や生徒指導部、広報部などの活動についても田村支会のよさである「温かさ」と親和性を大切にしながら活動を推進していきたい。

3 むすびに

連絡会において情報交換や連携を図るとともに、普段から校長同士の横のつながりを大切にしながら、田村地区の子ども達が安全に生活し、健やかに成長していけるよう、本会の活動を推進していきたい。

石
川

横のつながりを大切に

玉川村立須釜小学校 仁科 恵子

1 はじめに

本支会は、石川町、玉川村、平田村、浅川町、古殿町の5町村7名の少人数で組織されている。令和8年度人事異動により2名の会員が加わった。少人数であるが故に役職を兼務せざるを得ないなどの厳しい状況はあるが、横のつながりを常に大切に活動を行っている。

2 今年度の取組**(1) 運営の基本方針**

学校管理運営上の今日的な課題とその取組について情報交換する事で共有化を図る。

(2) 地区研修会

本年度も「学校経営上の諸問題」について各校の問題提起を受け、話し合いの場を設けていく。特に今日的課題である「教職員の業務改善と働き方改革、多忙化解消に向けた各校の取組」「教職員の資質向上に向けた取組」「生徒指導上の諸問題」等、学校経営全般に視点を当て、研究協議を進める予定である。

(3) 分科会研修

分科会研修では、第13分科会（社会との連携・協働）について取り組む。その中でも「視点2：成長の連続性を生かした学校段階等間の接続・連携の推進」に焦点を当て、各校の現状を会員全体で共有し、より具体的な実践の在り方を模索したい。全会員により進めることで、内容の濃い充実した研修になることが期待できる。

(4) その他

第3回の研修会において、県中教育事務所から地区担当管理主事を講師として招き「学校経営の今日的課題」をテーマに講話をいただき、教育現場での対応に役立てていきたい。

3 むすびに

小規模地区の強みを生かし、その時々々の状況把握や取組上の課題を共有し、迅速な対応を心がけている。今後も日常的に情報交換できる雰囲気を大切にしながら、石川地区の子どもたちのために教育を押し進めていきたい。

双
葉

「心をひとつに」

— 双葉の未来を拓く教育の創造 —

大熊町立学び舎ゆめの森 渡辺 哲也

1 はじめに

本支会は、双葉郡8町村の小学校長6名、義務教育学校副校長2名の計8名で組織されている。震災から15年という節目の年を迎え、何よりの励みとなったのは、天皇皇后両陛下と愛子内親王殿下による本校へのご訪問、ならびに被災地の視察である。復興へと歩み続ける双葉郡の姿を温かく見守っていただいたことは、子どもたちはもとより、地域全体にとって大きな希望となり、我々が教育活動を力強く進める上での揺るぎない原動力となった。

2 今年度の取組

(1) 研究の推進

「家庭や地域等との連携・協働、学校段階間の接続・連携の推進」を研究課題に掲げている。教職員一人一人の参画意識を高め、活力ある組織運営を目指すとともに、年3回の研修会を通して、校長・副校長が果たすべき指導性と役割を深く究明していく。

(2) 双葉郡ならではの教育活動

子どもたちが自ら未来を切り拓く資質・能力を育むためには、地域社会と密接に連携し、学校内外での生活を充実・活性化させることが不可欠である。児童数の減少や少人数教育への対応など、各校の現状には様々な課題があるが、これらを「双葉郡全体の課題」として捉え、以下の2つの柱を中心に、郡が一体となった教育活動を展開する。

○絆づくり交流会：町村の垣根を越えた小学生主体の仲間づくりと、教職員間の情報交換を促進し、郡全体の教育力を高める。

○ふるさと創造学サミット：「震災で子どもたちが得た経験を、生きる力に」という理念のもと、双葉郡8町村の小・中・高等学校が地域を題材に取り組み探究的な学びを行う。多様な他者と協働しながら、自らの考えを深める場を構築していく。

3 むすびに

現在在籍する児童は、東日本大震災における複合災害を直接は経験していない。一方で、保護者の心理的葛藤や家庭環境の不安定さなど、今なお影を落とす課題も少なくない。こうした中、本支会は「心をひとつに」を合言葉に、小中校長会との連携をさらに強固なものとし、子どもたちが自らの未来をたくましく切り拓いていけるよう、全力を尽くしていく決意である。

耶
麻

校長会を通した「学び合い」

喜多方市立熊倉小学校 武藤 盛男

1 はじめに

本支会は、喜多方市、西会津町、北塩原村の19名の会員で組織している。今年度は新任4名を含む7名の新しい会員を迎え、相談等がしやすい関係づくりを大切に、「耶麻はひとつ」を合言葉として課題を共有しながら、校長としての力量を高められるよう努めていきたい。

2 今年度の取組

(1) 校長としての資質向上

年4回の研修会を通して、校長としての研鑽を積んでいく。今日的な学校経営上の課題解決や、校長としての資質能力の向上のため、教育講演会を実施する予定である。また、他地区からの赴任者も多いことから、地域ならではのよさを伝え、横のつながりを大切によりよい学校運営の在り方を考えていく。

(2) 研究の推進

今年度は、「I学校経営 1経営ビジョン」「IV危機管理 9学校安全」「V教育課題 12自立と共生」の3つの分科会を組織し、研修会を効果的に位置付けることで、これまでの成果を生かしながら研究を深めていく。令和9年度開催の第79回全連小福島大会に向けて県事務局との連携を密にしていきたい。

(3) 各専門部会の活動

行財政部と生徒指導部は、諸調査の実施と集約を行うとともに、各校の実態に応じた課題解決へのヒントとなる情報提供等を行う。広報部は、会報「耶麻」を年3回発行し、各会員の学校経営への信念や工夫等を紹介したり、各市町村の情報を提供したりする予定である。

(4) 人材の育成

本地区においても、ミドルリーダー及び管理職希望者の育成等は積極的に取り組むべき課題であり、中学校長会や教頭会とも連携を図りながら、人材育成のための効果的な取組を進めていく。特に教頭職の魅力伝えるためにも教頭の働き方改革推進を急務とし、各校の取組の工夫等を共有していく。

3 むすびに

耶麻地区校長会ならではの温かく強い絆を大切に、互いに学び合い、課題解決へ向け組織としてのチーム力を発揮していきたい。

し
ら
東
西
わ

学校の未来を構想する

埴町立笹原小学校 佐藤 克浩

1 はじめに

本支会は白河市13校、西郷村5校、中島村2校、矢吹町4校、泉崎村2校、棚倉町3校、埴町2校、矢祭町・鮫川村各1校の23名の会員で構成されています。(棚倉町立高野小学校の閉校により1校減)令和7年度末人事異動により7名の会員を新たに迎え「県南は一つ」を合言葉に、会員一丸となって研修に取り組んでいるところです。

2 今年度の取組

(1) 研究について

本支会は県小学校長会の活動方針・重点を踏まえ、組織的に研究を推進しています。今年度から23名を5つの班に分け4つの領域について研究を進めていくことにしました。研究課題は以下の通り。

- ① 創意と活力に満ちた学校経営ビジョンの策定
- ② 学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりと学校経営
- ③ これからの学校組織を担うリーダーの育成
- ④ 様々な危機への対応と未然防止の体制づくり

(2) 研修の充実

年3回の研修会では、今日的課題や学校経営・運営に関わる諸課題に視点を当て、その改善策について協議しています。

研修会では、諸課題についての協議や情報交換の時間を十分に確保するとともに、有識者や先輩諸氏を招聘しての講演会を実施して研修を深めることができるよう努めているところです。

3 むすびに

本支会でも少子化や学校の統廃合をインセンティブとする変化が求められています。変化に応じたフレキシブルな能力を有する教員を育成するシステムの構築と時代に見合った望ましい学校組織の在り方を追求していかねばなりません。支会全体でナレッジマネジメントに努めていくことが必要不可欠です。

い
わ
き

いわきっ子のために
～みんなで創る one team いわき～
いわき市立泉小学校 梅原 広

1 はじめに

いわき支会は、中学校長が併任する2校を含む59校で組織され、市内4支部で構成されている。人事異動により新任6名、異動14名、再入1名という入れ替えがあったが「one team いわき」を合い言葉に会員相互の横のつながりを意識し、組織のさらなる充実を図っていく。

2 今年度の取組

(1) 活動目標

今年度は、活動目標を「ともに学び、変革し、学校の主体性・独自性を発揮する校長会」としている。59校が「団結」しながらも、地域の宝であるいわきっ子のために各校が「主体性・独自性」を発揮し、失敗を恐れず「変革」に取り組んでいく。

(2) 各専門部会

行財政部・研究部・広報部・生徒指導部の4部を設け、県の取組を踏まえて活動している。行財政部では、教育諸条件の課題解決のため、調査研究を行い、提案・提言活動の推進と教育活動の充実に取り組む。研究部では、4つのブロックにおいて「学校経営と校長のあり方」の視点を明確にして組織的・計画的な実践研究を進める。広報部では、広報「いわき」を発行し、会員相互の情報共有を深める。生徒指導部では、生徒指導上の課題について情報収集を行うとともに、関係機関等との連携を密にして適切な対応に努める。

(3) 市小学校長会研修会

「すべてのことはもっとよくなる」という意識を共有し、校長のリーダーシップによる円滑な学校運営の推進を目的に、研修会を実施する。

(4) 人材育成

人材育成は喫緊の課題である。採用を目指す講師、管理職を目指す教員を対象とした研修会を中学校長会と連携して実施する。

3 むすびに

いわきの未来を担う子どもたちのために、59名の校長が固い絆で結ばれ、「互助の精神」で支え合い、組織的に取り組んでいきたい。

太鼓を通じて様々な世代をつないでいくために…

霊山太鼓保存会会長 渡辺 健一さん

江戸時代の寛文年間から350年あまり続く霊山太鼓。霊山町内に約60組の太鼓が保存継承されています。例年9月末に開催される「霊山太鼓まつり」には30台を超える太鼓が集結し、総勢200人の打ち手が力強い同時打ちを披露します。霊山太鼓保存会の会長を務め、霊山太鼓の伝統を受け継ぎ子どもたちにつないでいく活動を進めると共に、太鼓まつりの実行委員長として運営にあたっている渡辺健一さんに、大切にしていること、活動の原動力になっている想いなどをうかがいました。



— 霊山太鼓保存会の活動について教えてください —

「霊山太鼓保存会」は昭和59年(1984年)に発足され、少子高齢化に伴う打ち手の後継者育成と350年あまり続く伝統文化の未来への継承を目的に活動しています。主な活動としては、「太鼓・しの笛講習会」を開き、一般の方々に募集を行い、子どもから大人まで広く伝統の技を伝えています。最大の見せ場である「霊山太鼓まつり」では、霊山太鼓保存会が中心となり企画、運営、出演と中心的な役割を担っています。

— 霊山太鼓の活動を次の世代につないでいくために取り組まれていることを教えてください —

太鼓まつりでは200~300人の打ち手による「同時打ち」が呼び物ですが、小中学生を対象にした「霊山太鼓コンテスト」などを実施し、若い世代の輝く場を創出しています。また、福島県を代表する伝承太鼓として、各地区の保存会から若手メンバーを集めた「霊山太鼓遠征組」を結成し、愛・地球博(2005年に愛知県名古屋市内で開催された日本国際博覧会)や国立劇場(2004年第99回民俗芸能公演において「日本の太鼓」として特別公演)での演奏、東京マラソンや2021年に開催された東京オリンピック聖火リレーでの応援太鼓のほか、香港や台湾での公演など、全国そして世界へ発信してきました。東日本大震災以降は、全国から頂いた支援に対する「復興感謝イベント」などにも数多く出演しました。その後の新型コロナウイルス感染症の流行により太鼓を叩けない時期もありましたが、現在は霊山太鼓まつりや様々なイベントを通し、元気に発信する活動を続けています。

— 活動の原動力や信条としてしていることがあれば教えてください —

保存会の活動と太鼓まつりの運営では、違った苦勞があります。まつりの開催には多額の費用がかかるだけでなく、運営にあたっては地元の歌手など他の出演者との交渉や交通安全協会・町内会など様々な団体との打合せなどが必要です。それぞれの団体と調整を図りながら、お客さん達に最後まで楽しんで見てもらえるよう内容も工夫しなければいけません。しかし、太鼓まつりの運営に関わる中で、太鼓を通じてできる様々な可能性に気づくことができました。現在は子ども達の打ち手が減っていますが、学校を卒業し県外に進学・就職した子ども達が、太鼓まつりのためだけに、年に一度、故郷に戻ってくるのです。太鼓まつりが機会となり、地域の人々がつながっているのです。改めて「霊山太鼓まつり」という発表の場が、地元を離れた若い世代と故郷をつなぐ重要な役割を果たしていると感じます。そして、自分自身も、世代をつなぐことに関わっている実感がやりがいにつながっていると感じます。

— 子どもたちに受け継いでいく上で大切にしていることを教えてください —

子ども達には太鼓を叩く楽しさを感じてほしいと思います。楽しさを伝えることで、たくさん子ども達が霊山太鼓に関わってくれたらと考えます。昨年、新しい試みとして YouTube で太鼓の基本的な叩き方を紹介する動画を配信しました。新たに霊山太鼓に興味を持ってもらい、他の地域からも人を呼び込み、まつりを活性化していくためです。「こうしなくちゃいけない」と伝統に縛られることなくフラットな考えで霊山太鼓の魅力を発信し、様々なイベントを通じて多くの人達に知ってもらい、これからも霊山太鼓を受け継いでいきたいと思っています。

プロフィール

- ・霊山太鼓保存会会長 ・石田東部太鼓保存会代表
- ・霊山太鼓まつり実行委員長 ・有限会社ワタックス社長

(聞き手:伊達市立柱沢小学校長 佐藤 実)

春の叙勲 ～おめでとうございます～

令和8年度の「春の叙勲受章者」が発表され、本会元会員の叙勲者は次のとおりです。

なお、規定により祝電をお送りいたしました。

☆瑞宝双光章（1名）

丹野 学 様 元 福島市立福島第四小学校長

令和8年度 小学校長会役員

◎支会長・常任理事 ○支会長

Table with columns: 職名, 氏名, 勤務校. Rows include 会長 (笠原聡美), 副会長 (佐藤秀一, 草野節生, 柏谷智也, 和田裕二), 監事 (榑原康夫, 穴澤正志, 石井智明), 支会長・理事 (福島の柏谷智也, 笠原聡美; 伊達の渡邊かおり; 安達の児山秀典; 郡山の草野節生, 遠藤修; 岩瀬の柿沼孝明; 石川の板橋敬史; 田村の榑原康夫; 東西の仁科英俊, 清野孝; しらかわの佐藤秀一; 北会津の穴澤正志; 耶麻の渡部健; 両沼の渡部学; 南会津の横山雄彦; 相馬の石井智明; 双葉の和田裕二; いわきの梅原宏).

(備考) 令和7年度から、役員選任（会則第6条(四)）の変更により、会員数が30名を超えない支会は理事1名となった。

令和8年度 小学校長会事務局員

◎部長・常任幹事 ○副部長

Table with columns: 役職名, 氏名, 勤務校. Rows include 事務局長 (穂積浩), 事務局次長 (齋藤仁道), 総務部 (高橋哲也, 小林雄, 島田祥司, 齋藤仁道, 吉田貴史), 経理部 (神尾孝弘, 旗野礼子), 行財政部 (穠山俊之, 車田敦子, 鳴原啓美, 佐藤育男, 梅津隆弘, 佐藤隆之), 研究部 (高澤里美, 佐藤智晃, 小松信哉, 渡辺博明, 佐藤倫子, 田村亮, 花輪忠康, 永井崇, 佐藤和仁, 佐々木信晴, 青田伸一, 石川勝佳, 石川淳, 高宮裕, 渡部由美子, 宇都宮弘), 生徒指導部 (富田貴俊, 片平智幸, 氏家博行, 青柳俊宏, 村松泰二郎), 広報部 (丹治達也, 荒川信一, 下重祐三, 渡邊圭司, 佐藤実), 事務局 (須田尊, 土田里美).

編集後記

今年度新たなメンバーでスタートしました。それぞれの立場から、様々な視点で編集することができました。ぜひ会報にお目通しいただければ幸いです。ご多忙の中、玉稿をお寄せいただきました皆様方に心より感謝申し上げます。

(一財) 福島県教育会館事業ご案内

福島県教育会館の下記事業につきまして、ご理解ご支援をよろしくお願い申し上げます。

- 福島県高校入試問題集
●福島県書きぞめ展 ●教育関係者名簿
◆貸会議室（教育関係者は半額）

福島市上浜町 10-38 office@kyouikukaikan.jp
TEL 024-523-0206 FAX 024-523-0208

- 発行 福島県小学校長会 〒960-8107 福島市浜田町4番16号 富士ビル2F TEL 024-534-5411
会長 笠原聡美（福島市立三河台小学校）
編集 丹治達也・荒川信一・下重祐三・渡邊圭司・佐藤実